

# 寧波の土地の記憶

——南宋末の思想家、黄震の足跡——

久 米 裕 子

## 要 旨

本稿は、文部科学省特定領域研究「寧波における知の営みとその伝統—学脈・宗族・トポフィリアー」（代表：信州大学・早坂俊廣）による共同研究の一環として、5年間にわたっておこなった現地調査にもとづいている。

本稿の目的は、清代を代表する歴史家・文学家・思想家である全祖望（1705～1755）の書院記を手がかりに、中国浙江省寧波市において、南宋末の思想家、黄震（1213～1281）ゆかりの土地を調査することで、黄震が当地に残した足跡を確認するとともに、黄震という人物がいかんして顕彰され、今なお語り継がれているか、また寧波の地理・風土が黄震の思想といかに関わっているかについて明らかにすることにある。

そこで第一章では黄震の思想史上における位置づけについて確認し、第二章では黄震生前の寧波における足跡をたどる現地調査報告をおこない、第三章では黄震の死後、後世の人々がその遺志を受けつぐ場となった祠や書院などに関する現地調査報告をおこない、第四章ではこれらの総括をおこなう。

キーワード：黄震、全祖望、寧波、慈溪、書院

## 1 はじめに

南宋末の思想家、黄震（1213～1281）<sup>1)</sup>は、慈溪（浙江省寧波市）の出身で、字は東発、号は於越、諡は文潔という。その学問は朱子学を旨とし、著に『黄氏日抄』九十七卷、『古今紀要』十九卷、『古今紀要逸編』一卷がある。その文献実証主義的な学問態度は、明末の黄宗羲（1610～1695）や、清代の全祖望（1705～1755）などから高い評価を得ている。

黄宗羲は『宋元学案』の中に黄震を中心に据えた「四明朱門学案二」（のちに全祖望がこれを「東発学案」に改める。四明は、寧波の別称）を立て、全祖望は黄震を評して次のように述べている。朱子学の系譜において、陳淳（1157～1223）や饒魯（1193～1264）らが訓詁に流れたのに対し、婺州（浙江省金華市）の何基（1188～1268）一派と明州（浙江省寧波市）の黄震一派は朱子学の深淵を伝えた。かつて南宋の朱熹（1130～1200）は浙東地方の学問を好まなかったが<sup>2)</sup>、端平年間（1234～1236）以後、朱子学発祥の地とも言うべき福建省や江西省では朱子学が振るわず、浙東地方が朱子学の中心地になった。この何基と黄震の両学派の活躍はまさに浙東地方の先哲たちの努力に報いるものであったと<sup>3)</sup>。

また全祖望は、南宋期の寧波における学術界の状況について、次のように述べている。寧波

の地には、朱熹・陸九淵（1139～1192）・呂祖謙（1137～1181）の学問がならび行われ、陸学について言えば、陸九淵の弟子の楊簡（1141～1226）・袁燮（1144～1224）・沈煥（1139～1191）・舒璘（1136～1199）があり、呂学の流れを汲む者としては、王応麟（1223～1296）を、そして朱子学については、黄震と巴陵（湖南省岳陽市）の楊岳（生卒年未詳）の教えを受けた史蒙卿（1247～1306）を挙げることができる<sup>4)</sup>。

なおこのように思想史上の評価は非常に高い黄震であるが、その官僚人生を見た時、その官僚としてのスタートは遅く、科挙に合格したのは、宝祐4年（1256）、44歳の時のことであった。しかもその順位は第四甲一〇五名であったため、科挙試験に合格後、与えられた職は、蘇州にある呉県の地方官という低いポジションであった。そして寧宗・理宗の両朝の国史と実録の編纂に従事した時期をのぞけば、官僚人生のほとんどを地方官として過ごしている。同じ寧波出身の思想家、王応麟（1223～1296）が中央官を歴任し、エリート官僚の道を歩んだのとは対照的である<sup>5)</sup>。しかし黄震は、その在任期間中、各地で善政をおこない、権力者を畏れず、民を労りつづけた。また黄震は、南宋が減んだ後、異民族王朝である元朝に仕えなかったことから、清廉高潔な人柄としても知られる。たとえば正史には、その官僚としての経歴や節義を重んじる態度のみが強調され、学術的な評価についてはあまり言及されていない。この点について、全祖望は「沢山書院記」にて、黄震の儒学史における位置づけに関する顕彰が不十分であると不満を呈している<sup>6)</sup>。

以上のことから、全祖望が黄震を南宋末を代表する朱子学者として位置づけていることがわかる。もちろん黄宗羲や全祖望が黄震を高く評価する背景には、彼らが黄震と同じ浙東地方の出身であり、彼らに郷土の賢人に対する非常に強い思い入れがあったことは否めない。しかし彼らの学術史観が、『宋元学案』として結実し、同書が宋元時代の思想史を理解する上でのスタンダードとなって以後、黄震の思想上におけるこうした位置づけは不動のものになったと言える。

## 2 黄震生前の足跡

黄震について、日本では中国学の専門家など、一部の限られた人を除けば、知る人はほとんどいない。しかし黄震の出身地である寧波の地には、今なお黄震の足跡があちらこちらに息づいている。ただしすでに述べたように、黄震はその官僚人生の大半を地方官として過ごしており、寧波で過ごした期間は、官位につく以前と官を辞して帰郷して以後の期間にほぼ限定される。

本章では、黄震の出仕前と引退後に焦点をしばり、寧波に残る黄震生前の足跡をたどりたい。そこでまず黄震の故居をとりあげ、次に黄震が晩年に戦火を逃れて寓居した沢山、日湖、桓溪、同谷、そして黄震終焉の地とも言える黄震の墓地がある杜湖一带をとりあげ、最後に黄震が生前訪れたという伏龍寺と宝慶寺をとりあげる。だが本題に入る前に、黄震の出身地について確

認をしておきたい。

黄震の出身地について、「黄震伝」には、「慶元府慈溪の人」とある（『宋史』巻438）。「慶元府」は寧波の旧称で、当時、「慈溪（県）」は「慶元府」の管轄下にあった。慈溪県は、旧県名で、唐の開元26年（738）に置かれ、県政府は現在の寧波市江北区の慈城鎮にあった。1954年の区画編成により、旧慈溪県北部、旧鎮海県北部、旧余姚県北部を併せて、新たな慈溪県となり、慈溪県は、あらためて寧波市に併合された。この区画編成にともない、慈溪県の県政府も慈城鎮からおよそ北西30kmの地点にある旧余姚県の澔山鎮（現在の澔山街道）に移された。なお慈溪県は、1988年に慈溪市となり、現在に至っている。

ちなみに「慈溪」という名称は、もともと当地にある谷川の名称から取ったもので、これは後漢の董黯（前漢の董仲舒の六世孫）という親孝行者が、母親のために慈溪から姚江を越えて10kmあまり離れた母親の故郷である大隱鎮まで溪谷の水を汲みに行ったという故事に由来する。なお明清時代は慈溪県の「溪」を「谿」と表記した。

さてこの「黄震伝」の記述に対し、全祖望「沢山書院記」は、黄震の原籍を「定海県靈緒郷」とし、のちに「慈溪」に移り住んだという（『鮚埼亭集外編』巻16）。しかし近年の研究では、『宝祐四年登科録』に黄震の原籍が「慶元府慈溪県」と記されていることや、黄震の自著、『黄氏日鈔』に自身の故郷を「慈溪」と記していること、また黄震と交流のあった学者たちもその出身地を慈溪としていることなどから、黄震の原籍を定海県とするのは誤りとされている<sup>7)</sup>。なお康熙26年（1687）以降、今の舟山列島を「定海県」と称する時期があったが、全祖望のいう「定海県」とは、現在の寧波市鎮海区・北侖区および慈溪市東部あたりを指している<sup>8)</sup>。

## 2.1 黄震故居

黄震の旧宅について、清の嘉靖年間に編纂された『寧波府誌』巻16には、「県の北五十里、地名は古窑」とある。また全祖望「沢山書院記」には、黄震の旧宅は「鳴鶴郷古窑」にあったとある（『鮚埼亭集外編』巻16）。近年、編纂された『慈溪県志』や『寧波市志』は、この「古窑」は「洋山郷黄家村」に当たるとしている<sup>9)</sup>。しかし調査当時、洋山郷は1992年の区画編成により東安郷とともに掌起鎮に併合され、さらに2001年の区画編成によって黄家村は戎家村・戴家村・西橋頭村と合併して戎家村となっていた。

黄震の一族は温州（現在の浙江省温州市）の樂清から慈溪に移り住み、裕福だった時期もあったが、黄震が生まれた頃には没落し、口に糊する日々であったという<sup>10)</sup>。現在、戎家村に黄震の旧宅があった場所を示すものは何もないが、村には黄震が幼少期にその上で寝そべて勉強をしたとされる橋が残されていた。黄震が苦学したことを物語るエピソードである。

橋は、慈溪市掌起鎮の中央部、国道329号線を少し南に下がった所にあり、黄震の旧宅はこの橋の北側にあったという（写真1）。橋の下を流れる河は、快船江といい、東は龍山鎮の龍頭場に始まり、ここ掌起鎮を抜けて、橋頭鎮に流れる洋浦に至る、全長22km、幅13～18m



写真1 戎家村（2007.8.24）

の河である（范市鎮以東では上塘河とも呼ばれる）。また快船江は、橋のすぐ手前で、ここから3 kmほど南に流れる上快船江から杭州湾へと流れ込む古窑浦と合流している。このように当地は水上交通の要所となっているが、比較的静かな落ち着いた雰囲気をもつ場所であった。ちなみに調査時に近隣の住人に尋ねたところ、黄震の名前を知る人は今もお多かった。なおこの橋については、次章にて詳しく述べる。

## 2.2 黄震寓居（沢山）

全祖望「沢山書院記」によれば、黄震は、官を辞した後、モンゴル軍の戦火が及ぶまで、定海県にある靈緒郷の沢山で過ごし、その住まいの入口には「沢山行館」と立て札し、その居室を「帰来之廬」と呼んだという（『鮎埼亭集外編』巻16）。なお定海県を黄震の本籍地とする全祖望の説は現在、否定されているが、そのことと晩年にこの地に移り住んだということは矛盾することではない。

また全祖望「沢山書院記」によれば、黄震の講堂は山の南側にあり、河に望み、海を背にし、周囲に松や菊が植えられ、当地はかつて山紫水明の地として大いに称えられ、王翔竜という人物が「沢山に遊ぶ」という詩を残しており、「高風に河影動き、斜月に竹身寒し。潮海の秋声とお闊く、山林の客夢安らかなり」と詠んでいる（『鮎埼亭集外編』巻16）。

なお黄震の死後、その弟子たちが黄震を記念してこの地に沢山書院を建てている。このことについては、次章にて詳しく述べる。

## 2.3 黄震寓居（日湖）

全祖望「沢山書院記」によれば、黄震は、沢山でしばらく過ごしたのち、日湖のほとりに移



写真2 日湖遺址 (2007.8.23)

り住んだという（『鮎埼亭集外編』巻16）。日湖一帯は、かつて仏教寺院が点在したほか、名家の出身者や高級官僚、文人などが多く居住した地域でもあり、『四明談助』巻21には、黄震の別荘もここにあったと記録されている。

日湖とは、寧波市の中心市街地の中央を南北に走る鎮明路をはさんで、月湖と対になる形でかつて存在した湖のことである。日湖は、別名、細湖、または競渡湖という。中心市街地の西方に位置する月湖が西湖と呼ばれたのに対し、南方に位置した日湖は南湖とも呼ばれた。ともに四明山（寧波市西部にある平均海拔700mの山脈）を水源としている。

寧波府から見て陽の方向（左側）にあった湖を太陽の「日」をもって名づけ、陰の方向（右側）にあった湖を太陰の「月」をもって名づけ、この「日」と「月」が、寧波の旧名である「明州」の由来になったという。また日湖の中央にはかつて蓮心島という島があり、天台宗三大祖庭の一つである延慶寺（現在の海曙区霊橋路）とそこから分離した観宗寺（現在の海曙区解放南路）がこの島の中にあった。ちなみに明末には南湖詩社がここで詩文を吟じ、清初には黄宗羲がここで第二回の証人書院を開くなど、日湖は学术交流の拠点でもあった。

しかし日湖は、清末になって湖内の堆積物が増えて汚濁し、1957年に埋め立てられてしまった。民国期に編纂された『鄞県通志』によれば、民国期の「日湖」に大きさは、長さ150m、幅40m、面積3,000m<sup>2</sup>で、これは当時の月湖の約28分の1の大きさに当たる。

かつて湖があった場所に、湖の痕跡はなく、現在は「日湖遺址」の石碑が立つのみである

(2006年6月建立)。石碑は、蓮橋街と解放南路の交差点の角に、解放南路に面する形で建てられている(写真2)。

ちなみに「日湖遺址」の石碑のわきを東西に走る蓮橋街という通りの名称は、かつてこの石碑付近にあった、日湖中央の蓮心島と日湖の岸边を東西につなぐ採蓮橋という橋の名前に由来する。この蓮橋街は、寧波市内でも有数の歴史的建造物を誇る場所であった。ところがその老朽化を理由に、2006年3月から大幅な取り壊し工事が始まり、2008年1月に入ってその工事はほぼ完了したという。一部の建造物は保留ないしは移築されるようであるが、明清時代の旧市街地の趣を伝える古い町並みは完全に失われてしまったと嘆く声もある。

参考までに述べると、2004年5月に江北区の江北湾頭に寧波市最大の都市型公園が完成したが、これを「日湖公園」と命名したことで、物議を醸している。2007年8月末の時点で、105名もの文化人が往時の日湖と何のつながりももたない「日湖公園」という名称に反対しているという。

#### 2.4 黄震寓居(桓溪)

全祖望「沢山書院記」によれば、黄震は、日湖に移り住んでからまもなく、今度は南に戦火を避け、桓溪に寓居し、みづからを「杖錫居士」と称したという(『鮎埼亭集外編』巻16)。「杖錫」の名は、寧波市西南部にある杖錫山(海拔800m)という山名にちなむ。杖錫山は、四明山脈のちょうど中央に位置し、平らかな山頂からは四方の山々が杖錫山を城郭のように取り囲んでいる様子を数百里先まで見渡すことができるという。山の南面には、「四明山心」と刻まれた高さ4.5m、幅2.5mの岩がある。

この桓溪は全祖望の郷里でもあり、その旧宅が寧波市鄞州区の洞橋鎮にある沙港村に現在も



写真3 全祖望故居(2007.8.22)

なお残っている（写真3）。洞橋鎮は、鄞州区の南部、奉化市との境に位置する。沙港村の北には四明山を水源とする桓溪が流れ、南には鄞江が東西に流れ奉化江に注いでいる。この桓溪の地には、宋元以来の四明の文人名士である豊稷・魏杞・楼鑰・王応麟・張良臣なども訪れている。

全祖望の旧宅は、調査当時には改修中で、4分の1まで修復されており、2008年には完成予定とのことであった。旧宅の前には桓溪が流れ込んでおり、船着き場の石段は昔ながらの様相をたたえていた。旧宅の建物は清代風建築によって修復されており、室内には全祖望の経歴を簡単に示したパネルと民芸調家具が展示されていた。

全祖望は乾隆元年（1736）に進士となり、翰林院庶吉士に選ばれる。また博学鴻詞にも挙げられるが、大学士の張延玉の妨げに遭って叶わず、また翌年には最下等の地方官に列せられたため、仕官の望みを絶ち、その年の内に帰郷した。そして以後、乾隆13年（1748）に、紹興（現在の浙江省紹興市）の戴山書院に招かれるまで、約十年間は当地にて学術研究に潜心した。

全祖望は「桓溪旧宅碑文」に「溪上盛んなりし時、碧の瓦・朱の薨、翬聳として鱗比し、之を望めば神仙の居の如し。嗚呼、盛んなるかな！」と描写し、当時の反映ぶりを謳っている（『鮚埼亭集外編』巻15）。なお沙港村の旧名は全家村といい、十里四方の住人はすべて全姓であったという。当地を案内してくれた鎮長もまた、全祖望の子孫であるとのことだった。全祖望の八世孫の全能柔氏などは、全祖望の墓の管理、族譜の整理、著述の出版など、祖先の顕彰活動を熱心におこなっている。また村内の桓溪沿いには、全氏一族の宗祠の建物が今もある。現在は鄞州区洞橋鎮沙港老年協会の活動室となっており、奥の大ホールに全祖望の肖像画のパネルや全氏一族ゆかりの石碑が飾られている中、老人たちが麻雀を楽しんでいた。

## 2.5 黄震寓居（同谷山）

全祖望「沢山書院記」によれば、黄震は、桓溪に寓居した後、さらに東に戦乱を避け、同谷に寓居したという。また「同谷」とは、寧波の中心から40里のところにある同谷山一帯のことで、そのふもとは宝幢河が流れ、西は大函山を、東は太白山を望む、寧波屈指の景勝の地であると記されている（『鮚埼亭集外編』巻16）。

この同谷山は、現在、寧波市鄞州区の五郷鎮に属している。またそのふもとにある村は、同岫村（現在は宝林村と合併して宝同村という）といい、旧名を同谷村といった。「同谷」という名称は、かつて西北東の三方を山に囲まれ、村民が同じ南の谷間から出入りをしていたことに由来する（写真4）。

参考までに全祖望の書院記に登場する山河について述べると、宝幢河は、現在、北から同谷山等の流れを受け、国道329号線沿いに西へと流れ、太白山に水源をもつ後塘河（別名、東塘大河）に合流している。また大函山は、そのふもとにおいて5つの流れが合流する水路の要所で、ここは北宋期から南宋期にかけての思想家、焦瑗（生卒年未詳）の書院があったところで



写真4 同岙村 (2007.8.23)

もある。焦瑗は、北宋の思想家、程頤（1033～1107）の弟子で、北宋滅亡時に難を避けて山東からここ鄞県（寧波）に移り住んだ。そして太白山は、鄞州区と北侖区の境界にある海拔656.9 mの山で、その南側のふもとには中国禅宗五山の一つとして知られる天童寺があり、別名、天童山とも呼ばれる。天童寺は、日本曹洞宗の開祖、道元が学んだ場所としても有名である。

## 2.6 黄震墓

徳祐2年（1276）、モンゴル軍によって南宋の首都、臨安（現在の浙江省杭州市）が陥落した。このときの黄震の様子について、南宋の詩人、謝翱（1249～1295）の「宝幢山尋黄提刑震旧避地处」（『晞髮集」巻4）によれば、黄震は宝幢山に逃れ、筵に座し、日に一食という状態であったが、不死の薬を求めることはせず、二度と城内には戻らないと誓ったという。また『宋元学案』にも、黄震は、宋が滅びると、宝幢で餓死したとある（『宋元学案』巻86「東発学案」）。

黄震の墓について、雍正期に編纂された『慈溪県志』によれば、墓は「県の西北五十五里の杜湖山」にあるという。近藤一成氏は、童兆良氏の『溪上尋踪』（寧波出版社、2005年）を引いて、「墓は宓家埭郷西埠頭村付近にあり、当地では探花墳頭と呼ぶ。1975年に墓は破壊され墓誌が流出、西埠頭村の張来根の家にあった石を、同年袁展如先生が見出し、慈溪文物管理委員会に収納した」と述べる<sup>11)</sup>。現在、この墓誌は、慈溪市博物館に保管されているという。なおこの墓誌によれば、黄震は、辛巳の年（1281）に病のため先祖の墓のかたわらにある精舎にて亡くなったという。

黄震の墓誌が発見された西埠頭村は、現在の杜岙村の旧名で、慈溪市最大の湖である杜湖の西岸に位置する（写真5）。杜湖の周辺一帯は、かつて鳴鶴郷と呼ばれていたが、2001年に観城鎮・師橋鎮と合併して、現在の観海衛鎮となった。鳴鶴郷は、三国・呉の儒者である虞翻、



写真5 杜湖 (2007.8.24)

東晋の天文学者である虞喜，唐の書家である虞世南の出身地であり，「鳴鶴」という地名は，虞世南の曾孫にあたる虞九皋の字にちなんでいる。

鳴鶴郷は，唐宋の頃から浙東地区の重要な塩田として栄え，千年以上の歴史を誇る地域である。黄震がこの鳴鶴郷の出身であることは，黄震がその赴任先で各種塩政改革をおこなったことと無関係ではないだろう。また南方には五磊山（海拔424 m）をはじめとする山々が並び立ち，中央には杜湖および白洋湖が開け，古くから風光明媚な土地柄としても知られる。そして五磊山には，浙東地区最古の五磊禅寺（国家AAA級旅游区）があり，杜湖の北岸には，「鳴鶴古鎮」と称される古い町並みがあり，明清時代の古建築や歴史的な価値をもつ橋などを見ることが出来る。そして現在，五磊山～杜湖（含白洋湖）～鳴鶴古鎮～上林湖～栲栳山の地域を合わせて，「鳴鶴一上林省級風景名勝区」に指定され，観光名所として開発が進められている。

## 2.7 その他

### 2.7.1 伏龍寺

伏龍寺（写真6）は，觀蜃楼，千丈岩，摩崖石群，鴛鴦湖，仙人橋など，数々の絶景・名所旧跡がある伏龍山中にある。その優れた景色は古くから知られ，唐代の功臣の尉遲恭，宋代を代表する政治家の王安石，文豪の蘇軾，明代の民族英雄の戚繼光，明末清初の思想家の黄宗羲，清仏戦争の際に寧波をフランス軍から守った浙江提督の欧陽利見，近代では高僧として名高い弘一大師，さらには浙江財閥の指導者として知られる銀行家の虞洽卿など，歴代の名士，高官，文人たちがこの地を訪れている。そして黄震もまたこの伏龍寺を訪れ，「登伏龍山」（『延祐四明志』卷18）という詩を残している。

伏龍山は，慈溪市東南部の龍山鎮にある海拔282 mの山で，浙東名山の一つに数えられる。



写真6 伏龍寺（2009.8.25）

元々は鎮海県に属していたが、1954年の区画編成で慈溪県（現在の慈溪市）の管轄下に入った。その名称は、龍が伏せた山の形状に由来する。寧波市内から、国道329号線を北上すると、九龍湖のあたりで大蓬山に行き当たり、国道はこれを東に迂回する形で伏龍山方面に続いており、現在は、国道から寺まで、車両用の道路が開通している。

現在の海岸線は寺からかなり離れた位置にあり、山頂から眺めてやっと見える程度だが、かつては海岸線が山のふもとにあり、伏龍寺は、舟山列島の普陀山と対比されて「小普陀山」とも呼ばれていた。寺の歴史は古く、唐の咸通3年（862）に、鑒諸禪師がこの地に庵を結び、伏龍禪寺と名づけたことに始まる。浄土宗の寺としては、中国でも最も古い部類に入る。北宋期に寿聖禪寺と改名し、南宋期にはさらに広福禪寺と改めたが、のちに現在の伏龍禪寺という名称に戻し、現在に至っている。かつて日本との交流もあり、日本の永和年間（1375～1381）に鑄造された青銅の大鐘が贈られたこともあった。しかし残念ながら、送り主である日本の寺名は今に伝わっていない。

寺の建造物は、日中戦争の際、日本軍によって焼き払われてしまったため、現在はその床石や石段が残されているだけである。しかし山のふもとに住む村民の協力を得て、徐々に復興し、近年、三聖殿が立派に修復された。この復興工事は、今後も引き続き行われていく予定である。

寺は、海に面して南向きに建てられ、正山門を出ると、そこから山のふもとまで参道が続いている。参道は、左右に草が生い茂り、大人が2人並んで歩くのがせいぜいといった道幅であったが、長い歴史の中で踏み固められており、多少の雨にもぬかるまないような、しっかりとした良い道であった。本節の冒頭に挙げたような、書物の中でしかお目に掛かれない歴史上の人物たちが、実際にたどったのと同じ道を歩いていると思うと深い感動を覚えた。参道の途中、蓮花池という池の横を通りすぎると、その傍らには虞洽卿（1867～1945）の墓道があった。「赤

脚財神」と称される虞洽卿は、この伏龍山の出身で、山のふもとにはその旧宅が残っている。

しばらく行くと、今度は海側に展望の開けた場所に出た。かつては海岸線が山の裾野までできていて、伏龍山はまさに沿岸の孤島であったとの説明を受けた。そしてさらにここは橋だと言われたが、橋どころか川さえも見あたらない。ところが脇道に逸れて参道の下におりると、我々が先ほど立っていた場所がちょうど橋の上であり、その下を小さな溪流が流れていることがわかった。この橋は刺史橋、俗に仙人橋と呼ばれ、慈溪市の文物保护单位にも指定されていた。橋は高さ3mほどのアーチを描き、その上には「古迹重来」の4文字が刻まれていた。

溪谷の側には、橋の由来が記された光緒30年（1904）の石碑が建てられていた。この橋は、かつて王安石が寧波に刺史として赴任した際に造られたという。今でこそ小さな溪流だが、当時は参拝者にとってかなりの難所だったと推測される。今回は、山のふもとから車で寺に入ったが、次回はぜひこの参道を歩いて伏龍寺を訪れたいと思った。

### 2.7.2 宝慶寺

慈溪市から見て南東の方角、姚江の北岸、青林渡の北（寧波市江北区莊橋街道）にある宝慶寺（別名、宝慶律院、宝慶講寺、宝慶教寺）もまた黄震と縁のある寺院である。光緒年間に編纂された『慈溪縣誌』巻41によれば、宝慶寺は宋の端拱2年（989）の創建で、開禧年間（1205～1207）に至って大いに栄え、嘉定15年には「宝慶院」の扁額を賜った。その後、幾度となく火災に見舞われ、重建を繰り返したという。この宝慶寺に対し、黄震は「宝慶院新建観音殿記」（『黄氏日抄』巻88）という記事を残しており、その記事を刻した石碑が、現在、境内に設置されている。なお同寺院には、王応麟の「宝慶講寺記」を刻した石碑も置かれており、1996年、王応麟の逝去700周年の際には、宝慶寺にて記念活動がおこなわれ、境内には王応麟記念堂がある。



写真7 宝慶寺（2009.8.25）

### 3 黄震の遺志を受けつぐ場所

本章では、黄震の死後、黄震を記念して寧波の地に建てられた建造物や講学所など、黄震ゆかりの場所として、古臥床橋、黄文潔祠（文潔は、黄震の諡）、沢山書院、杜洲書院、同谷書院、甬東書院、そして近年、重建された沢山書院およびこれとは別に沢山書院の跡地を名乗る沢山寺をとりあげる。

#### 3.1 古臥床橋

前章でとりあげた黄震が幼少期にその上で寝そべて勉強をしたとされる橋について、もう少し詳しく述べる。この橋は、古臥床橋、あるいは臥床橋とも呼ばれ、別名は護龍橋という（写真8）。この橋について、清の嘉靖年間に編纂された『寧波府誌』巻6に、「臥床橋、県の西北五十里、黄東発（東発は、黄震の字）、其の上に臥して読書す、今、泥橋為り」とある。

現在、慈溪市の掌起鎮戎家村にある古臥床橋は、全長11.0m、幅2.5mの石板橋で、橋桁は4本の石の方柱から成り、中央に四角いアーチを描き、橋の両端は八の字の形になっている。また東側の欄干には「古臥床橋」、西側の欄干には「護龍橋」と刻まれ、龍頭の彫刻を施した橋台の東側の両柱には「地は涓川に接し是れ名賢の故里、堤は上閘に連なり古浦の清流汚る」、西側の両柱には「煙景波光を看れば往昔と殊ならず、流風余韻を想えば直ちに今に至る」という対句が刻まれている。

清の戎金銘（慈溪の人、著に『溪北詩稿』がある）の「重建臥床橋記」（『光緒慈溪県志』巻11）によれば、この橋は宋代に造られ、土橋であったものが、後に石橋になったという。また橋は、黄震の逸話にちなんで「臥床橋」と名づけられたが、時代とともに「護龍橋」の名称が



写真8 古臥床橋（2007.8.24）

一般化していった。しかし橋と黄氏一族の結びつきは強く、道光6年（1826）に黄氏一族の寄付により、橋は重建されている。そしてさらに50年の年月をへて、橋が傾いてきたところ、再び黄氏一族の手により、光緒2年（1876）から翌年にかけて、橋は修復された。その時、橋の西側の欄干には、地元民が慣れ親しんできた「護龍橋」の名前を、そして東側の欄干には、先賢ゆかりの遺跡であることが忘れ去られないよう「古臥床橋」の名前を刻んだという。

古臥床橋（護龍橋）は、1982年に慈溪県重点文物保護単位の指定を受けている。また橋のすぐわきを走る通りは、橋の名前にちなんで、臥床橋路と名づけられていた。

### 3.2 黄文潔祠

清の光緒年間に編纂された『慈谿県志』巻14によれば、慈溪の県政府の東に1里ほどのところ、校士館の西隅に、黄震を祀った祠があったという。校士館とは、科挙の試験場で、慈溪は、かつて鄞県、余姚に並んで、多くの科挙合格者を輩出したことでも知られる町である。そして黄震もまた慈溪出身の科挙合格者であり、この先賢にあやかるべく校士館のかたわらにその祠が建てられたのであろう。

慈溪の県政府は、すでに述べたように、唐の開元26年（738）に慈溪県が設置されてから、1954年に区画編制が行われるまで、寧波市の中心部から北西15kmほどのところにある慈城鎮という町に置かれていた。県政府の建物は、かつて町の最北部にある浮碧山のふもと、慈湖の南にあったという。かつて県政府があったこの場所には、『光緒慈溪県志』がその巻頭に載せる精緻な「県署図」に基づいて、現在、清代当時の県政府の建物が忠実に復元され、「県衙」という慈城鎮の新たな観光名所となっている。これにあわせて県政府の東にあった校士館もまた、かつてあった場所に「校士館」として再建されている。そしてこの新たな「校士館」の西



写真9 黄文潔祠（2006.8.26）

隅には、黄震を祀った祠もまた復元されている（写真9）。

「県衙」および「校士館」は、建造物だけでなく、その内装はもちろんのこと、当時の役人や受験生の姿までもが蠟人形で復元されており、やや生々しい印象を与える。しかし歴史ある慈城鎮の町は、けっしてレプリカの町などではなく、明代の古建築が数多く残っており、1991年に浙江省の省級歴史文化名鎮に指定されている。

なおこの「県衙」と「校士館」の北にある慈湖のほとりには、かつて南宋の思想家で、黄震と同じ慈溪の出身である楊簡の慈湖書院があり、慈湖の東にある山のふもとには、楊簡の弟子の桂万榮（生卒年未詳）がひらいた石坡書院があった。楊簡、字は敬仲、号は慈湖。陸象山の高弟で、すでに述べたように、袁燮・沈煥・舒璘とともに「淳熙四先生」と呼ばれ、浙東地方の陸学を代表する人物である。朱子学を旨とする黄震は、陸学（心学）が禅学に根ざしている点を大いに批判しているが、楊簡の学問態度には敬意を表していたと全祖望は述べる（『鮎埼亭集外編』巻16「杜洲六先生書院記」）。なお現在、この慈湖書院の跡地には慈湖中学が建てられている。

### 3.3 沢山書院

沢山書院は、かつて黄震の住まい、すなわち沢山行館があった場所に、黄震の死後、黄震を記念して、後学者が建てた書院である。沢山書院は、現在の慈溪市の三北鎮南部の徐福村にあったとされる。全祖望「沢山書院記」によれば、書院は定海県にある靈緒郷の沢山にあったという（『鮎埼亭集外編』巻16）。参考までに靈緒郷について述べると、靈緒郷は、旧郷名で、現在の慈溪市西部に相当する。靈緒郷は、その領域内に靈緒湖（現在の靈湖）があったことからこの名がつく。なお、靈緒郷は、1950年に靈湖郷に改められ、1954年の区画編成により鎮海県から慈溪県の管轄に移り、現在、靈湖一帯は慈溪市范市鎮に属し、沢山書院があったとされる一帯は慈溪市三北鎮に属している。

さて全祖望「沢山書院記」によれば、沢山書院は、元の至正年間（1341～1367）に建てられたが、その後、間もなくして焼失した。後に同族の黄礼之（黄震の五世孫）という人物がこれを復建したが、全祖望の書院記が書かれた頃には書院はすでに廃れており、全祖望はその跡地を復興すべきであると訴えている。さらにまた黄礼之は、黄震の大著、『黄氏日抄』を復刊し、その版木を書院内に所蔵していたが、全祖望の頃には、これらの版木ももはや存在していなかったという（同上）。

なお明の鄭真（1322?～?）の『滎陽外史集』巻48、『嘉靖寧波府誌』巻16、『光緒鎮海縣志』巻10などには、黄震を記念して当地に建てられた書院を「沢山書院」ではなく、「湖山書院」と記されており、全祖望の「沢山書院記」にも、旧抄本では「湖山書院」と記されている。また宋の陳著（1214～1297）の『本堂集』巻30などは「湖山精舎」としている。ちなみに書院の跡地がある大蓬山のふもと、窖湖の西岸には、かつて湖山村という村があり、2001年にこ

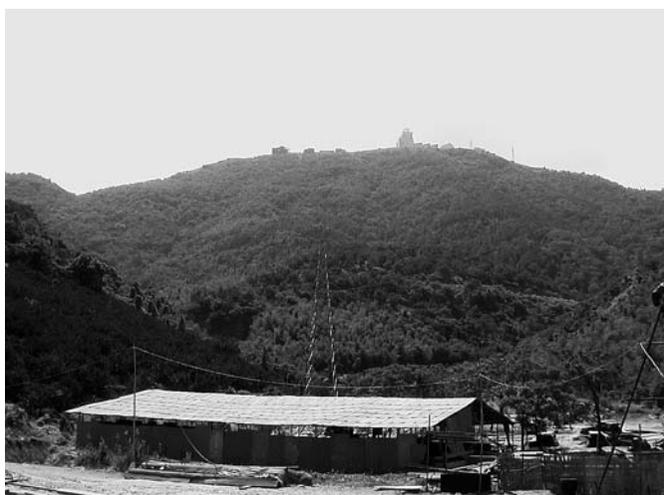


写真 10 徐福村 (2007.8.24)

の湖山村と上田央村が合併して徐福村ができたのである。この一帯には黄震の末裔が今なお多く住み、『湖山黄氏宗譜』という家譜が残されている<sup>12)</sup>。

徐福村についてももう少し詳しく述べると、その名称からわかるように、当地は徐福ゆかりの地として知られ、書院の跡地の近隣には徐福小学が建てられていた。また調査当時、当地は、「達蓬山文化旅游区」として、2008年5月の開園をめざし、至る所で工事が進められていた。一番の目玉は「徐福文化園」という巨大テーマパークであるが、この開発計画の一環として、沢山書院も修復されることとなった。そのため調査当時、書院の跡地一帯は完全な平地となっており、書院跡地に隣接して建てられていると聞いていた廟も移築され、現場に置かれた建築資材を見学することしかできなかった(写真10)。

書院跡地の旧来の姿こそ確認できなかったが、その後方には大蓬山(別名、達蓬山、海拔422m)がそびえ立ち、前方には窖湖(別名、沈窖湖、集雨面積6.4km<sup>2</sup>)が広がり、当地が風光明媚な土地柄であることは確認できた。大蓬山と窖湖について、参考までに述べると、まず大蓬山の名は、秦の始皇帝が東巡した際に、この地から蓬萊を目指して出帆しようと考えたことに由来する。また大蓬山の南部分は香草が多いことから、別名、香山とも呼ばれる。なお香山を大蓬山と切り離し、それぞれを一つの山とみなす見方もある。次に窖湖は、もともとあった自然湖の跡を拡張したもので、湖水の透明度は高く、「宝水一番」と評されている。またこの湖周辺も「飲楽水岸区」として、開発途中であった。

### 3.4 杜洲書院

杜洲書院は、南宋の思想家、楊簡の弟子として知られる童居易(嘉定16年(1223)の進士)およびその子孫によって運営された書院である。全祖望「杜洲六先生書院記」によれば、同書院



写真 11 杜洲書院遺址（2007.8.24）

には、この童居易を筆頭に、息子の童鍾・童鋹、弟子の曹漢炎・嚴畏、そして交友のあった黄震の計六名をあわせ祀っていたという（『鮎埼亭集外編』巻16）。ここにまた黄震の朱子学・陸学といった学派の枠を越えた交流が見られる。なおのちには黄震の子、黄叔英がこの杜洲書院にて講義を行っている（『九靈山房集』巻23「王先生墓誌銘」、『宋元学案』巻86「東発学案」<sup>13)</sup>）。

杜洲書院の所在地については、諸説があるようだが、一説に五磊山のふもと、杜湖東岸、現在の慈溪市の観海衛鎮師東村にあったとされる。これは先に紹介した黄震の墓誌銘が発見された場所のほぼ対岸に位置する。

また全祖望「杜洲六先生書院記」によれば、杜洲書院は、南宋末の童居易の孫、童金によって設置され、その子、童桂のときに朝命を得て、顧嵩之・孫元蒙を山長に招いている。童居易、字は行簡、号は杜洲先生、鳴鶴の出身で、楊簡の正統な後継者として、石坡書院を建てた桂万榮と並び称される人物である。童氏一族の学問は、何代にもわたって継承され、杜洲書院は、当時の寧波において、設備的にも制度的にも完備した書院であった。元代初期から明代初期にかけて杜洲書院は寧波随一の書院として隆盛を誇ったが、明代中期以降、童氏一族の衰亡とともに、廃れてしまった（同上）。

現在、その跡地には、一本の大木が生えているだけで、書院の痕跡は何も残されていなかった。書院は「五磊寺服务部」と記された倉庫から見て、大木を間に挟んだ向かい側あたりにあったという（写真11）。なおこの倉庫は、五磊山の山中にある五磊禅寺の下院である旧石湫頭寺の跡地で、現在の石湫頭寺は、調査地点と同じ下院路沿いの南側に拡張移築されている。

### 3.5 同谷書院

黄震が南宋末の戦乱を避けて同谷（寧波市鄞州区五郷鎮宝同村）に寓居したことは前章にて



写真12 王応麟墓（2007.8.23）

記したとおりである。実はこの同谷は黄震と同時代の思想家、王応麟の出身地として知られ、同谷山の山中には、王応麟の墓の跡地がある（写真12）。墓は、同岫村の鄞州公墓永安墓園という共同墓地の龍舌墓区の奥の山林の中にあった。その墓道が見つかったのは、1997年のことで、その前年は王応麟の逝去700周年に当たり、鄞県人民政府や宝慶寺がその記念活動をおこなっていたが、この時点では墓の所在は不明であった。というのも、地方志等に墓に関する記録はあったものの、1960年代に当地の谷間にダムが建設されて以来、それが1990年代に廃止されるまでの間、一般人の当地への立ち入りが難しかったため、その発見が遅れたのである。しかし村民の石像に関する情報を手がかりに、この翌年、ついにその墓道が発見されるに至ったのである。ちなみに村民の多くは王応麟の子孫であり、墓の管理者も王姓とのことである。墓そのものは崩れて、正確な位置はもはや分からなくなっているが、その墓道および墓道をはさんで並ぶ石像は、2005年に鄞州区の文物保護単位に指定される。

また全祖望「同谷三先生書院記」によれば、当地には、南宋の思想家、陳埴（1197～1241）が代々住み、『四明談助』巻41によれば、山のふもと和省元坊というところにその旧宅があった。またさらに当地は全祖望一族ゆかりの地でもあり、全祖望は、呂学・朱子学・陸学の継承者である王応麟・黄震・陳埴の三先生と自身の六世祖にあたる全元立を祀る書院をここに建てるべきであると「同谷三先生書院記」において主張している（『鮚埼亭集外編』巻16）。

### 3.6 甬東書院

甬東書院は、南宋の丞相、鄭清之（1176～1251）が、その師、樓昉（生卒年不詳）を記念して建てられた書院である。「甬」は寧波の別称で、書院が寧波市街地の東部にあったことからこの名がある。書院は、明代には一旦、廃れたが、清の康熙11年（1672）、全祖望がここに

寧波を代表する朱子学者の一人である史蒙卿（1247～1306）を祀り、甬東静清書院として復興した。「静清」は、史蒙卿の号である。

全祖望「甬東静清書院記」によれば、甬東書院は、初め栖心寺という寺の側にあったが、寺の拡張工事にともない、書院は寺の敷地内に併合されてしまった。そこで程端礼（1271～1345）・程端学（1278～1334）兄弟の父、程靖斎（生卒年不詳）が書院を史一族の住居の傍らの独善坊というところに移した。しかし、その後、書院は衰退し、野菜園と化してしまったという（『鮎埼亭集外編』巻16）<sup>14</sup>。

史蒙卿、字は景正、果斎先生と称され、みづから静清居士を号した。咸淳元年（1265）の進士で、江陰・平江の教授を歴任し、程端礼・程端学兄弟がこれに師事した。すでに述べたように、史蒙卿は黄震とともに寧波の朱子学を支える二大巨頭として並び称される人物で、『宋元学案』中、黄震は「四明朱門学案二」（のちに「東発学案」）が立てられたのに対し、史蒙卿は「四明朱門学案一」（のちに「静清学案」）が立てられており、全祖望は両者の関係を車の両輪あるいは鳥の両翼にたとえている（『鮎埼亭集外編』巻16）。

また全祖望は、史蒙卿はその功績に比して、これを顕彰する者がいないことを嘆き、また書院が重建された経緯も踏まえ、史蒙卿をこの書院の代表に据え、「甬東静清書院」と称した。ちなみに史蒙卿は、寧波の名家、史一族の末裔で、史彌鞏（1170～1249）の孫に当たり、書院の移転先である独善坊という名称は、史彌鞏（独善先生）の邸宅があったことに由来する。

『四明談助』巻31には、甬東書院は、元の至正28年（1291）に僧侶によって取り壊され、のちに慶元路儒学教授の呉宗彦という人物が楼昉の講舎があった張斌橋の東側に書院を移し、至正14年（1354）に重建されたとある。また甬東書院は、程端礼・程端学兄弟が、父の書院重建という志を継ぎ、その師である史蒙卿を祀ったことから、「二程孔夫講堂」と俗称されたという。



写真13 七塔寺（2008.8.27）

現在、甬東書院（甬東静清書院）の痕跡はどこにも残っていないが、当初、書院の側にあったとされる栖心寺とは、旧市街地を東に離れ、奉化江の三江口近くにかかる霊橋を渡った先の寧波市江東区の百丈路にある七塔寺（別名、七塔禅寺、報恩寺、七塔報恩禅寺）のことである（写真13）。七塔寺は、天童寺、阿育王寺、観宗寺とともに「浙東四大叢林」の一つに数えられる。文化大革命期に破壊行為に遭い、寺は有名無実の状態となったが、1980年以降、徐々に復興され、現在、その寺の規模は寧波市街地では最大級であり、浙江省の重点文物保護単位に指定されている。

住職の可祥法師のお話では、かつて張斌橋の側には張斌橋庵というお寺があり、そこが甬東書院の移転先となったとのことであった。甬東書院が移転されたという独善坊の位置はわからなかったが、その近隣で、現在も牌坊が残る彩虹坊（寧波市江東区彩虹北路）を訪れた。現在、彩虹坊は、「味道江湖」という四川料理のレストランの外観を飾っていた。なお彩虹坊は、江東区の文物保護単位に指定されている。また張斌橋については、かつて七塔寺近辺にあったが、現在は取り壊され、その跡には何も残っていないとのことだった。ただ中山東路と甬港北路の交差点を北上してすぐ西に入ったところにある賢良巷沿いの「張斌社区」という住宅街があり、この住宅街のすぐそばの中山東路沿いにあるバス停に「張斌橋」という名称が残されていた。

### 3.7 その他

#### 3.7.1 重建沢山書院

2007年の調査の際、沢山書院が近々復興されるとのことで、周囲一帯が工事中であった。そこで2009年に、あらためて当地を訪れたところ、前回、工事中であった沢山書院の跡地には、中国唯一と謳う巨大な中華石窗園（雅戈爾石窗博物館）が建てられていた。「石窗」とは、中国の古代建築に見られる、石板に装飾的な透かし彫りをほどこして造った石窓のことである。

この石窓博物館の「精品館」には国内最大級の石窓や宋元時代のものとされる石窓が展示されている。また「精品館」は、石窓がガラス張りの壁や床に飾られたモダンな造りとなっていた。「精品館」のほか、人物の彫刻をほどこした石窓は「人物館」に、動物の彫刻をほどこした石窓は「動物館」に、そして人物・動物以外の吉祥文様などを彫刻した石窓は「博古館」に、といった具合に、彫刻の文様のテーマごとに石窓が展示されていた。また「精品館」の建物以外は、いずれも中国の古建築風の建物で、内部に石窓を展示するだけでなく、実際の建物に石窓がはめ込まれるなどしていた。さらにこれらの展示館を取り囲む庭も、伝統的中国式庭園になっており、達蓬山を背景に、庭園の中に川を流し、滝や池を設け、周辺に竹林、橘林、水蜜桃林、楊梅林を植えるなどして、自然散策ができるようになっていた。

調査対象である当の沢山書院は、この石窓博物館の一角を彩るオブジェと化していた。当地はもはや「沢山書院遺址」ではなく、「重建沢山書院」ないしは「新沢山書院」と呼ぶべきものに様変わりしていた。沢山書院入口には、「九龍噴水」が設けられ、「真言論対は時奥を陳ね、



写真 14 重建沢山書院（2009.8.24）

「深徳躬行は日鈔に見ゆ」と記された牌楼が建てられていた（写真 14）。入口から中に入って正面には孔子像が飾られた「載衡堂」が、左側には琴や将棋板が展示された「篤行齋」が、右側には黄震像が飾られ、その生涯や事績について展示され「思齊堂」が、そして後方には沢山書院の復元図を飾った「東浙文瀾」という扁額を掲げた建物がある。パンフレットには、いずれも南宋建築の風格を今に伝えているとある。

この石窓博物館の周囲に目をやると、その隣には慈溪達蓬山大酒店という五つ星のホテルが、通りを挟んで向かい側には「八十日間世界一周」をテーマとする「世界自然人文主題樂園」という遊園地が、そして湖周辺には買い物を楽しめるレトロなショッピング街が立ち並んでいた。そしてこれらを取り巻くかたちで、「雅戈爾香湖丹堤」というヨーロッパタイプの別荘地が広がっており、一帯は国家 AAAA 景地に指定されていた。

ちなみに当地の開発事業を一手に引き受けた雅戈爾（ヤンガー）は、中国の服飾業界を牽引する一大アパレルメーカーで、1979 年、慈溪に設立され、2000 年には多角経営に乗り出し、不動産なども扱うようになった。この地元企業が、杭州湾大橋ができるにあたって、故郷に錦を飾り、観光客の誘致を図るべく、慈溪に巨大な文化・歴史・娯楽設備を作り上げたのである。

### 3.7.2 沢山寺

慈溪市三北鎮の徐福村にある沢山書院遺址とは別に、「第二沢山書院遺址」とも言うべき沢山寺という寺院が、慈溪市の東部、観海衛鎮の新沢村（国道 329 号線の東河橋の北側）にある。

新沢村は、観海衛鎮の東南部にある沢山村、下沢山村、廟橋村が合併した村で、沢山村と下沢山村の名前は、それぞれ沢山（別名は上沢山、海拔 39 m）と下沢山（海拔 30 m）という山名に由来する。西の沢山と東の下沢山は、手を携えたように立ち並び、姉妹山とも称される。

沢山寺（旧名は沢山庵、別名は碩槃または夕庵）の歴史は、北宋期にインドの高僧が沢山のふ



写真 15 旧沢山寺 (2009.8.25)

もとに庵を開いたことに始まるという。現在、沢山寺は、この沢山の東側の中腹から山頂にかけて東向きに建てられており、本殿から村が一望できた。また本殿の後方に回ると、コンクリートで塗り固められた沢山の山頂が間近に見える。そして寺の傍らには後湾池という池があった。

調査当時、寺はちょうど拡張移転工事の真っ最中であった。ちなみにこの寺の前身は沢山禅院といい、山の裏手にあたる西側のふもとにまだ残っていた(写真15)。寺の内部を住職の定意法師に案内してもらったが、コンクリートの壁や電気の配線がむき出しになった室内には旧日本尊が仮置きされ、新たに増設された大型の仏像は顔の部分にのみ塗装がされているという状態であった。

見学後、当地こそが沢山書院の跡地であると主張する地元研究者の余麟年氏を紹介してもらった。沢山書院は、宋末元初の思想家、黄震を記念して、その死後、後学者によって建てられた書院である。全祖望「沢山書院記」によれば、黄震は、官を退いた後、沢山に移り住み、講学活動を行ったという。またその講堂は山の南側にあり、河に望み、海を背にし、当地は景勝の地として大いに称えられたとある。余麟年氏は、沢山はこの立地条件をすべて満たしているという。

現在の沢山は海岸から10 kmほど内陸にあるが、かつて沢山と下沢山は海の中にそびえ立つ障壁で、出港のよき目印となるため、近隣の漁民は両山の間を船で通って海に出ていたという。また現在、寺の傍らにある池は、旱魃の際にも枯れたことがないといわれる。そして何よりも当地には沢山という名の山が存在する。この沢山と黄震の関係は深く、全祖望「沢山書院記」にもあるように、沢山の旧名は櫟山といい、黄震がこれを沢山と改名したと言われている<sup>15)</sup>。

確かに徐福村にあったとされる沢山書院の跡地も、かつては海沿いにあり、後方に山、前方に湖という条件は満たしているが、肝心の山名は大蓬山(あるいは香山)である。ただ資料に

よっては、黄震の死後に建てられた書院を「湖山書院（あるいは湖山精舎）」とするものもあり、沢山という山があるというだけでは根拠として弱い。

しかし余麟年氏は、王翔龍という人物が、黄震に会うため、沢山を訪れていることに注目し、少なくとも黄震の隠居後の講学活動は沢山にて行われたのではないかとしている<sup>16)</sup>。王翔龍が「沢山に遊ぶ」という詩を残していることは本章にてすでに述べたとおりだが、どうやら余麟年氏は、この王翔龍を、黄震の族弟にあたる黄翔龍（慈溪の人、宝祐元年（1253）の進士、黄震の学侶である黄翔鳳の弟で、臨汝書院の山長を務めた人物）と同一人物であると考え、沢山に来て黄震の住まいを訪ねたと、ほかならぬ黄震の族弟が言っているのであるから、沢山に黄震の住まいがあったことはまず間違いがないと言うのである。

なお『延祐四明志』巻7は同詩の作者を「王翔龍」としているが、この詩を引用した『宋詩紀事』巻67は「王翔龍」について「四明の人、宝祐元年の進士」と解説している。そこで宝祐元年の科挙合格者の名簿を見ると、「黄翔龍」と「汪翔龍」という二人の人物が挙げられているが、「王翔龍」の名前は見られない（『延祐四明志』巻6）。しかし近年刊行された周律之主編『寧波地名詩』（寧波出版社、2007）は、同詩の作者を「黄翔龍」としている。実は中国の南方では「黄」と「王」の同音現象が見られ、このことは古くは唐の古文家、柳宗元が「黄溪記」の中で指摘している<sup>17)</sup>。したがって「沢山に遊ぶ」の作者が黄震の族弟の黄翔龍であった可能性は非常に高い。

このほか余麟年氏は、全祖望「沢山書院記」に、黄震晩年の講学の地は、黄震の旧宅に近く、その子孫が多く住んでいるところとあることから、確かに徐福村には黄震の子孫が多く住んでいるが、徐福村よりも沢山の方が黄震の故居がある鳴鶴郷により近いと主張された。そしてまた黄震を記念して、その死後に建てられた書院は、何も一つとは限らず、複数の沢山書院（ないしは湖山書院）が存在してもおかしくないとも言われた。

筆者の中国語能力に限界があり、当日は十分な議論ができなかったが、この件に関して、沢山寺の住職、定意法師が、現在、論文を執筆中とのことであった。今後の沢山書院遺址の跡目争いに注目したい。

#### 4 おわりに

黄震は、朱熹四伝の弟子に当たる。もう少し詳しく言うと、朱熹（1130～1200）と呂祖謙（1137～1181）に学んだ輔広（生卒年未詳）の弟子、余端臣（生卒年未詳）のそのまた弟子の王文貫（宝慶二年（1226）の進士）の弟子とされる（『宋元学案』巻64）。全祖望は、黄震を南宋末を代表する朱子学者と位置づけながら、その思想内容は、古人ののこした書物から獲得されたもので、特定の人物の思想をそのまま継承したものではないとしている（『鮎埼亭集外編』巻16「同谷三先生書院記」, 「沢山書院記」）。

また黄震の著述、『黄氏日抄』について、『四庫全書総目提要』は次のように述べる。「黄震は場合によっては諸家の説を引いて朱熹の説を補い、場合によっては朱熹の説を捨てて諸家の説を採用することもあり、学派の枠組みに固執しなかった」と。さらにまた黄百家は『黄氏日抄』という著述は、諸儒の説を折衷したものである。すなわち朱熹に対してもあえて迎合せず、その独自の見解は非常に深い』（『宋元学案』巻86「東発学案」）と評している。

全祖望は、黄震当時の学术界の様子について次のように述べている。浙東地方の学者たちは、鼎の支柱のように朱子学・陸学・呂学の三学派が並び立ち、雨のときは笠をかぶり、夜には灯りをともし続け、互いに訪問しあい、互いの良い所を取って自分自身を磨いた。それはまるで同じ一つの峰に異なる種類の苔がそれぞれ繁茂して隆盛を誇るような状態であったと（『鮚埼亭集外編』巻16「同谷三先生書院記」）。

寧波市は、現在、浙江省の経済の中心地で、副省級都市に指定されており、また日本の政令指定都市に相当する計画単列都市でもある。そしてそれと同時に、保国寺、阿育王寺、天童寺、天一閣蔵書楼など、多くの文化遺産を誇る全国歴史文化名城にも指定されている。また淳熙四先生（四明陸学）、姚江学派（陽明学派）、浙東学派といった多くの思想家を輩出した場所としても知られる。そして本稿でも紹介したように、寧波市内のいたるところに思想家の故居や書院・蔵書楼といったかつての学術拠点の痕跡が、あるいは大々的に顕彰され、あるいは半ば埋もれつつ、今なお寧波の地に記憶されている。朱子学者である黄震と、時を同じくして陸学を奉じた楊簡の関係についてはすでに述べたとおりであるが、こうした黄震の柔軟な学問態度は、まさに多彩な学派が鼎立した時代性および学術交流の盛んな寧波の風土によって磨かれたと言える。

本稿の冒頭にも述べたように、日本では黄震という思想家がどのような人物であるか、一部の専門家を除けば、ほとんど知られていない。ところが寧波市内では、黄震と言えば、多くの人がその名を知っており、まさに地元で根ざした思想家であり、中国人の地元の先賢に対する関心の高さが見受けられる。かく言う筆者も、現地調査に参加する以前、黄震と言えば、まず念頭に浮かぶのはその著述であった。当たり前すぎるかもしれないが、現地調査を通じて、黄震が寧波の地に確かに息づいていたこと、そしてそれが現在にもつながっているということ、実感をもって確認することができた。

また重建沢山書院に飾られた、黄震の生涯を紹介する4枚のパネルのうちに2枚はその善行や人柄について紹介されていた。また徐福村で刊行されている『達蓬山の伝記』という徐福について紹介した小冊子の巻末にも、黄震の同様のエピソードが小説仕立てで描かれていた。貧しい出身でありながら学問に励み、官位を得てからも権力者に媚びず、民衆の味方でありつづけようとした黄震は、現代において、全祖望の評価とはまた違う形で語り継がれていることがわかる。

最後に、この現地調査は、まず研究代表者の早坂俊廣先生（信州大学）によって、寧波における学術拠点について顕彰した全祖望の書院記を手がかりに、寧波出身の思想家たちの足跡を

たどろうという指針が示され、そしてこの指針にもとづき、方祖猷先生（寧波大学）、王介堂先生（江北区仏教協会）、銭明先生（浙江省社会科学院）を中心に、地元の研究者の方々に現地を案内していただいた。そして共同研究の一環として、訪問地に関する報告書を、早坂先生、荒木龍太郎先生（活水女子大学）、安部力先生（北九州工業高等専門学校）、黒田秀教先生（台湾明道大学）らと分担執筆し、これをデータベース化してインターネット上に公開する予定である。本稿は、筆者自身が担当した箇所を中心に、黄震という人物を軸に、その報告書を再編し、加筆修正を加えたものである。本稿では、現地調査を通じて得られた知見を紹介してきたが、これらの多くは私一人の力によって得られたものではなく、ここに名前を挙げきれないほど多くの方々からご教示いただいたものである。この現地調査に関わったすべての方々に謝意を表したい。

#### 注

- 1) 黄震の思想に関する拙稿は、以下のとおりである。「『黄氏日抄』の巻数」（『中国研究集刊』景号，平成5年）、「黄震の経学－「読礼記」における注釈の態度」（『待兼山論叢（哲学篇）』第27号，平成5年）、「黄震の『春秋』解釈」（『待兼山論叢（哲学篇）』第31号，平成9年）、「黄震の四書学」（『元代經學國際研討會論文集』下巻，平成12年）。
- 2) かつて朱熹は葉適を中心とする事功学派（永嘉学派）を否定的な意味合いを込めてこれを「浙学」と呼んでいた。
- 3) 「東発学案」（『宋元学案』巻86）および全祖望「沢山書院記」（『鮚埼亭集外編』巻16）を参照。なお「沢山書院記」（既出）において、全祖望は、何基の学問が朱熹の高弟、黄幹に基づいていること、また黄震の学問は朱熹が残した著述に基づいていることを指摘するとともに、何基は、王柏（1197～1274）、金履祥（1232～1303）、許謙（1270～1337）といった後継者に恵まれ、後に従祀されるに至っているが、黄震は後継者が得られず、その系譜が埋没してしまったことを嘆いている。
- 4) 全祖望「同谷三先生書院記」（『鮚埼亭集外編』巻16）を参照。
- 5) 黄震と王応麟の官僚人生の比較については、近藤一成「南宋地域社会の科举と儒学－明州慶元府の場合」（『宋代中国科举社会の研究』所収、汲古書院、平成21年）を参照。
- 6) 全祖望「沢山書院記」（既出）を参照。
- 7) 張偉「黄震の生平、學術淵源及著述」（『黄震と東発学派』所収、人民出版社、2003年）を参照。
- 8) 後梁の開平3年（909）に現寧波市の北部に定海県（初名は望海県）が置かれた。ところが康熙26年（1687）に、定海県は鎮海県に改められた。というのも明の洪武20年（1387）以来、寧波府の管轄下にあった昌国県（現在の舟山市定海区）に新たに定海県が置かれることになり、同名を避けるためにこのような名称変更がおこなわれたのである。なお鎮海県は、1954年の区画編成により、澥浦嶺以西は慈溪县（現在の慈溪市）の管轄となり、1985年には、甬江を境に、南側は現在の寧波市北侖区に、北側は現在の寧波市鎮海区となり、区人民政府は鎮海区域関鎮（現在の蛟川街道）に置かれ、現在に至っている。
- 9) 張偉「黄震の生平、學術淵源及著述」（既出）を参照。
- 10) 張偉「黄震の生平、學術淵源及著述」（既出）引黄玠『弁山小隱吟録』「原序」・黄震『黄氏日抄』巻46・78・93・95。
- 11) 近藤一成「黄震墓誌と王応麟墓道の語ること－宋元交替期の慶元士人社会－」（『史滴』30号，2008）を参照。
- 12) 『湖山黄氏宗譜』は、現在、上海図書館が所蔵する膨大な族譜コレクションの一つとして保管されている。
- 13) 黄震の墓誌銘には、黄叔英ではなく「黄儒英」とある。近藤一成氏によれば、「儒英」は幼名であった

可能性を指摘している。近藤一成「黄震墓誌と王庇麟墓道の語ること—宋元交替期の慶元士人社会—」(既出)を参照。

- 14) 全祖望は多くの書院記を書き残しているが、そのすべてについて必ずしも実体としての書院が存在したとは限らない。この「同谷三先生書院記」がその一例である。
- 15) 『延祐四明志』巻7に「沢山、県の西北九十里、旧名は櫟山」とあり、注に「唐の吏部郎官、黄公震、雅ならざるを以て今名に改む」とある。
- 16) 『延祐四明志』巻7は、黄震は引退後、「沢山」のふとみに「湖山行館」を建てたとしている。
- 17) 柳宗元の南方方言研究については、戸崎哲彦「柳宗元の文学と楚越方言(上)—唐代中期・9世紀初における中国西南少数民族の言語文化—」(『滋賀大学経済学部研究年報』4号, 1997)を参照。

#### 参考資料

- 黄宗羲『黄宗羲全集』浙江古籍出版社(1998)  
 全祖望『全祖望集彙校集注』上海古籍出版社(2000)  
 徐兆昞『四明談助』寧波出版社(2000)  
 周律之主編『寧波地名詩』寧波出版社(2007)  
 近藤一成『宋代中国科举社会の研究』汲古書院(平成21年)  
 張偉『黄震与東莞学派』人民出版社(2002)  
 戴均良等編『中国古今地名大詞典』上海辞書出版社(2005)  
 浙江省鄞縣地方志編委会『鄞縣志』中華書局出版(1996)  
 宁波市地方志編纂委员会編/愈福海主編『宁波市志』中華書局(1995)  
 慈溪市地方志編纂委员会編/徐长源主編『慈溪县志』浙江人民出版社(1992)  
 慈溪县地名委员会編『慈溪县地名志』上海中華印刷厂印(1988)  
 慈溪市地方志編纂委员会編『慈溪市图志』西安地图出版社(1993)  
 镇海县志編纂委员会編『镇海县志』中国大百科全书出版社(1994)  
 泽山村志編纂领导小组編『泽山村志』国营余姚印刷厂(1997)  
 雕龍中国地方誌全文検索叢書「浙江省—寧波市地方誌(DVD-ROM)」凱希メディアサービス

## The Memory of Ningbo-City

### Following Huang Zhen's Footprints

Hiroko KUME

#### Abstract

In this paper, by reporting my meticulous fieldworks, I identify the footprints of Huang Zhen (a Chinese thinker in the late Nan-Song Dynasty) in Ningbo-City, clarify how he has been publicly honored and handed down the generations there, and elucidate the close relation between his thought and Ningbo-City. After explaining the significance of Huang Zhen's thought in history of ideas in the Section I, I report having retraced his steps and conducted some field surveys on a small shrine, some private schools, and so on, with reference to Quan Zuwang's record of shuyuan (private school) in the Section II and III, and summarize these reports to confirm Huang Zhen's connection with Ningbo-City in the Section IV.

**Keywords:** Huang Zhen, Quan Zuwang, Ningbo-City, Cixi-City, shuyuan(private school)